

平成 30 年 10 月号より連載されている**佐藤智充副院長著述の連載の第 6 回目 (最終回) です**。今回で最終回となりましたが、赤十字の成り立ちから現在まで、これを読めばあなたも赤十字通！！



戦争と災害と赤十字

第 6 回 (最終回) 赤十字とボランティア

平成 30 年 8 月 12 日に山口県周防大島町で行方不明となった 2 歳の男児を 78 歳のボランティアである尾島春夫さんが現地に駆けつけるや、わずか 30 分で発見したというニュースは記憶に新しい。尾島さんが周防大島町に駆けつけるまで現地の警察や消防も捜索していたわけであるが、男児が大きな怪我もなく発見されてとても喜ばしいと共に、もしかすると苦々しく思った人も居たかもしれないし、実際に警察や消防に対して「何をしていたの？」という意見があったようである。さらには発見した尾島さんに対してまで男児に飴を食べさせてあげた行為に対して「そんな行動は危険だ」と言って批判する人も居たようで、昨今の SNS などによる批判には辟易するばかりである。その後尾島さんは多数のメディアで取り上げられて「スーパーボランティア」と呼ばれ、月数万円の年金収入で全国の被災地に交通費や食事代なども全て自己負担で軽トラックで駆けつけるなど、素晴らしい活動が連日メディアなどでも英雄として報道されることとなった。

さてボランティアというと尾島さんのようなことをしないとイケないかということ決してそんなわけではなく、尾島さんのような方は極めて特殊である。体力づくりのために毎日 7~8km を走るそうであるが、そんなことは尾島さんより 30 歳若い私でも出来ない。

ボランティアに関しては社会福祉協議会や全国の大学の研究、またはメディアなどで多くのアンケート調査の結果があるが、「ボランティア活動に興味があるか？」という問いに対しては概ね 7 割程度の方は「興味がある」と回答している。しかし、実際に行動に移す人は少なく、その理由としては「仕事や家事が忙しくて時間がない」「生活収入に余裕がない」「役に立てる自信が無い。または却って迷惑をかけてしまうのではないかが心配」「活動しようと思ってもどこに連絡して良いか分からない」などが理由の多くとして挙げられ、その他にも「家族に反対される」「万一の怪我や病気の際の補償」などの回答もあった。

ボランティア活動には大変多種多様な活動があり、家の近所の掃除も立派なボランティアであるし、海岸のゴミ拾いや高齢者のお世話、降雪の多い地域などでは大雪に伴う雪かき、お祭りなど地域行事の手伝い、交通安全や防災・防犯活動、募金や寄付金、献血等々、他にも様々な活動があり、いずれの活動も立派なボランティアである。

来る東京オリンピックでは約 11 万人のボランティアが必要と言われている。世界中から集まる観光客に語学力を生かした通訳や案内、清掃、交通案内、防犯、医療や介護ボランティア等々確かに様々な分野でのボランティアが必要であろう。

社会行動学の分野ではボランティア活動が複数回に渡って続くか否かは、最初に参加したボランティアが充実し、満足したものになるか否かによってその後が決まると言われている。ボランティア活動を行う年齢層を見ると 70 歳代の方が最も多く、仕事が定年となって、ある程度時間があることや経済的にも余裕があるのかもしれない。さらに重要なことは 70 年以上生きてきたことの「経験」や「知識」「技能」であり、健康維持のためにボランティア活動を行うのも大いに「あり」である。

赤十字ボランティアの中にはアマチュア無線やスキーパトロール、視覚障がい者支援、語学支援、芸能披露等の特殊な経験や知識、技能がとても役立つボランティアもある（特殊赤十字奉仕団）。その他にも高齢者支援活動や児童の健全育成活動としての「地域赤十字奉仕団」、献血推進活動や防災活動、HIV/エイズ予防啓発活動などに取り組む「青年赤十字奉仕団」、または個人で災害救護活動のノウハウを習得し、災害時にはボランティアセンターの運営や情報収集、炊き出し、安否調査などに参加する「個人ボランティア」などがある。

小野田赤十字病院でも多くのボランティアの方々が活動されており、入院患者や老人保健施設に入所されている方々に対して大変お役に立って頂き、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

以上、イントロダクションを含めて7回の連載を終える。とりとめのない戦争の話などの回もあったが、読者が「へえ～」と思って頂けるだけで構わない。赤十字に属する職員には改めて自分たちが所属する組織に誇りを持ち、そうではない方々には是非とも今後も赤十字の活動のご支援を賜りたくお願い申し上げたい。

ご賛同いただける方にはわずかな社資で赤十字社員になる制度もある。さらには赤十字の活動は紛れもなく皆様からの寄付とボランティアによって成り立っていると強く訴えると共に深謝申し上げます。

詳細は日本赤十字社または日本赤十字社山口県支部のホームページをご覧ください。

読者の皆様方からの反響があれば、また別の機会に執筆を行いたいと思う。

ご意見・ご要望があれば下記のメールアドレスにご連絡をお願いしたい。

文責 佐藤智充
tsato-ymg@umin.ac.jp

～ 筆者プロフィール ～



小野田赤十字病院
副院長 佐藤 智充（さとう ともみつ）

1970年、山口県生まれ
2004年、山口大学大学院先端分子応用医科学講座
診療科：外科
専門医資格等：日本外科学会外科専門医
マンモグラフィ読影認定医
がん治療認定機構がん治療認定医
感染制御医（ICD）
災害医療コーディネーター